

動物実験研究からヒトを対象とした疫学調査研究へ

河 岸 重 則

(九州歯科大学健康促進科学専攻生命科学講座摂食神経科学分野 助教授)

深井先生

先生と初めてお会いしたとき、私は大学院理学研究科を出て九州歯科大学に奉職したばかり、先生は学生でした。それから25年になります。現在の様々な方面での先生のご活躍、とても感慨深いものがあります。その間私は何をやってきたのだろうかと思ひながらこれを書いています。

私は昨年から、学生時代を含めて30数年間携わってきた「試験管相手の生化学実験研究」から離れ、ヒトの舌の立体認知能の「疫学調査研究」を始めました。今日はその辺の事々をお手紙します。

私は小さい頃から「生命の真理」に関心がありました。そして大学進学で選んだのは、その当時唯一の真理探究法であると考えた自然科学で、生化学を専攻しました。研究の出発点は理学部「化学科」の生化学、実験材料は「細菌」でしたので、研究をしているとき、あまり「生物」を意識したことはありませんでした。「化学の一分野の生化学」、生体で起きる「生化学反応そのもの」が興味の対象でした。歯科大に来てラットを実験動物として用いるようになって、徐々に「生物」を意識するようになり現在にいたっています。

時々自分は何を求めて研究を続けてきたのだろうと考えます。「真理探究」が根底ではありますが、もっと単純なところでは取り組んでいる実験研究に成功したときの感動だと思います。大学院時代の研究はある特殊な酵素を他の酵素との混合物から分離精製してその性質を調べることでした。その研究では酵素の分離の成否を試験管内の

酵素反応液の色の変化でチェックしていました。4年間酵素のいろいろな分離法を試してはうまくいきませんでした。そして最後に分離に成功して、今まで何年も試しては変わらなかった反応液の色が変わった瞬間は思わず叫んでしまいました。色が変わったあの瞬間の感動が忘れられなくて仕事を続けてきたのだらうと思います。

長年、そういう気持ちを基に、動物を実験対象とする生化学実験を続けてきました。しかし、今も生化学に対する興味は持ち続けていますが、日々の研究が、学会発表のための研究、研究のための研究という、ノルマをこなすだけの形になりがちです。また、私の研究分野では多くの研究が様々な遺伝子操作を施した動物を対象としてなされるようになってきました。そのような研究も必要です。しかし、私はそのような酷い（と私は思うのですが）動物を作製する気にはなれず、そして普段の研究でも動物を殺すことに耐えられなくなってきました。

さらに別な心境の変化もありました。若い頃は自然科学で明らかにされるものが「真理」であると考え理学部での勉学を選びました。しかし、それなりに齢を重ねてみますと、真理とはそんなちっぽけなものではない、真理とは多面体であり、自然科学は多面体の一面を明らかにするに過ぎないとも考えるようになりました。また若い頃のヒトに対する興味は細胞の集まりとしてのヒトであり、ヒトの生命の仕組みの不思議さでしたが、今、ヒト一人ひとりに興味が湧いてきました。もっとヒトの個体と直接関わりのあること、ヒトの役に

立つことをしたいという思いが大きくなってきました。

近年はこんな思いを抱いて日々過ごしていたのですが、3、4年前にヒトを対象とした「学生実習」を組み立てる必要に迫られました。咀嚼効率などの実習をやっているうちに、「ヒトの舌の立体認知能」のテーマに行き着きました。摂食機能リハビリテーションの基礎研究です。現在、研究の一環として老人ホームの高齢者の方々の舌の立体感覚を調べさせていただいています。動物や試験管を相手に研究してきた私にとって、ヒト一人ひとりに向かい合って検査させていただきデータを得るというのは、とても刺激的なことです。検査の際、昔話などいろいろなお話を聞きながらやっています。ヒトそれぞれの個性があり、人となりを理解して仕事を行う難しさを痛感するとともに、その違いに触れることを楽しんでます。そして、得られた一つのデータの裏側に一つの人生があると思うと、データを単なる数値として統計的に扱うだけではなく一人のヒトが存在する重みを含むように表してみたい、そしてそれにはどうデータをまとめ、今後研究を展開していけばいいのかと模索しています。

ヒトとは社会的な生き物であり、特定の個人同士でもその関係は刻々と変わっていくもの、そこにおける真理とは何なのか、それを自然科学的方法論であらわすことができるのか、という思いも抱えています。国立民族博物館教授の吉田集而先生の「食文化の研究」に関する著書（石毛直道監修、講座「食の文化」第1巻人類の食文化、味の素食の文化センター、1998）の中に私の思いが共鳴する文章があります。少し長くなりますが、引用させていただきます。「科学的方法論の重要な前提は普遍主義である。ヨーロッパの人であれ、インドネシアの人であれ、中国の人であれ、人には変わりない。その人に共通する現象を取り上げる。あるいは、物事はあるときと場所で起こるものであるが、そのときや場所を越えた原理を探そうと

する。そういう立場である。それに対して、新しい方法論は、人の違いを認め、場所や時間の異なりを認め、その場から物事を引き離さない。言ってみれば、普遍主義に対して個別主義と呼べばいいであろうか。「ここでいう方法論では、物事を分解しない。そのまま全体を取り上げる。物事は多義的であるとみる。そして、定量的には扱わず、定性的に物事を観察する。そして、得られる結論は、直感的な類推であり」「得られる結果は、研究者の主観がはいつており、研究者が異なれば結果も異なる可能性がある。それでいて、それが確かであると言うのは、他の人々もそう思うかどうかにかかっている。他の人の主観で判断して、それが正しいかどうかということである。もしも多くの賛同が得られたらならば、主観同士が納得したということになる。すなわち間主観の納得である。それゆえにこれを間主観的方法論とよぶ。私は、この方法論がすべてであるとは思わない。ほかにもあるかもしれなし、科学的方法論を排除するものでもない。むしろ、組み合わせるべきと考えている。」

摂食機能リハビリテーションにおいても、肉体の摂食機能だけを見るのではなく、医療関係者と患者さんの関係や患者さんの文化背景をも視野に入れた、間主観主義と科学主義を組み合わせた方法論でリハビリを考えていく研究を展開できないだろうかと思っている今日この頃です。こういったことは既に先生たちが日常の診療やネパールのプロジェクトで実践されていることだと思います。そういう点では、私にとって1997年にネパール歯科医療協力隊に参加して生活用水の分析を担当したのが今の研究方向への切り替え時点であったのかもしれませんが。

この辺で筆を置きます。とりとめのない私の思いを読んでくださり有難うございます。健康にご留意されて益々活躍されることを祈念しております。